

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 6 月 30 日発行 第 24 号

パプアニューギニアと石巻の相互理解

昼食後、始めに石巻専修大学の坂田隆学長からパプアニューギニア大学生に震災当時の石巻及び学内の状況についての講演がありました。坂田学長は震災当時の写真、地図、グラフなどを用いて、流暢な英語で説明していました。坂田学長の講演中、聴衆は真剣な眼差しで耳を傾けていました。また、涙を浮かべる人もいました。講演後、私が印象について一人の二十代男性に質問すると「震災当時がいかに大変だったかが理解できた。とても綺麗な英語でわかりやすかった」と坂田学長を称賛していました。

次に岡野ゼミの学生により日本文化の紹介がありました。石巻の学生たちは初来日の学生たちに日本伝統の折り紙や書道の体験、海外でも人気のある漫画の紹介を行いました。初めて見る折り紙や書道に彼らは驚き、そして楽しんでいる様子でした。体験をした二十代女性は「日本人はとても繊細な技術を持っているのですね」と真剣な表情で話してくれました。

その後、訪問側の大学生により自国の紹介がありました。それは歴史や政治、教育、大学、民族文化やスポーツなど幅広い内容で私は今まで知らなかった事が多数ありました。パソコンを使用し、写真やグラフを用いて説明していました。説明を聞いていた石巻専修大学の生徒は「とても良い勉強になった。文化の違いがあって驚いた」と話していました。

大学内での交流会が終了し、その後、バスを利用して被災地の視察に出かけました。始めに震災により大打撃を受けた石巻市立門脇小学校へ行きました。そして、石巻専修大学生 2 名による震災当時の小学校とその周辺の状況について説明を受け、悲惨な状態の小学校を目にした人々は驚きと悲しみの表情を浮かべていました。

最後に震災の影響を受けた石巻市魚町にある水産加工会社の大興水産株式会社に工場見学に行きました。大興水産株式会社は石巻市から津波避難ビル第一号と認定された会社であり、防災意識が非常に高い会社です。ビルのすぐ近くに鉄格子で囲まれた階段が設置され、非常時はその階段を上り、社外の人もビルの屋上にたどり着くことができます。また、太陽光による自家発電装置などが設置されています。さらに、社内には食料などの備蓄は勿論、リラクゼーションルームや救護室なども完備され、他の企業にない施設が多数ありました。そして、工場の中は魚を加工するために必要な大きな機械が多数あり、外国人学生たちは写真を撮りながら歓声を上げていました。また、矢継ぎ早の質問をし、会社について理解しようとする様子が見られました。

私は彼らと接し、文化や物事の見方の違いを知ることができました。二十代の女性は「日本の良い所を沢山知ることができた。また、石巻の状況や津波に対する対策について勉強できて本当に良かった。ここに来ないと知ることができないことが沢山あった」と話してくれました。私はこれに慢心するのではなく、さらに県外の人々や海外の人々に東日本大震災による教訓や石巻の復興の様子を伝えていきたいと考えています。

(久道 溪)

パプアニューギニア大学生の石巻訪問

6 月 18 日(火)、パプアニューギニア大学生 13 人が、石巻市を訪問しました。彼らは青年海外協力協会の事業で日本へ招待されており、主な目的は東日本大震災による被害や復興の様子の調査でした。この日の日程は、石巻専修大学訪問、体験や研究の紹介、学食での昼食、学長講演、日本文化の紹介、被災した門脇小学校や石巻市初の津波避難ビルとなった大興水産社屋の視察、でした。

10 時 30 分過ぎに彼らがバスで石巻専修大学に到着し、そのまま学長室へ移動して記念の写真撮影が行われました。私たちは大学の玄関で到着した彼らを出迎えたのですが、私たちに彼らの方から「コンニチハ!」と気さくにあいさつをしてくれたのが印象的でした。今振り返ると、これで私たちの緊張も解けたと思います。

その後、職員の案内で学内を見学し、大学内の教室へ場所を移し、石巻側の情報提供が行われました。

私は、石巻のような地方都市を活性化させる観光の力について、彼らの前で発表しました。私にとって外国人を前に英語でのスピーチは初めてで、文章に苦労しましたが、なんとか発表日までに完成させました。

現在、日本の主な産業は人・物・金の集まる大都市圏に集中しており、地方都市には有力な産業が無く、働き手が大都市圏へ流出し、人口減少などの問題が発生しています。そんな石巻での観光業により、交流人口の増加による宿泊業や飲食業の需要増加、経済の活性化や雇用の創出などが期待できると説明しました。

他に、金津は自身の石巻での被災体験、丸岡教授はサン・ファン・パウティスタ号と支倉常長のヨーロッパ訪問について紹介しました。

この間、パプアニューギニア大学生は皆、メモを取り、真剣に話を聞いていました。

今回の交流は、私にとって自分の視野を広げる上で非常に良い経験になりました。同年代とはいえ文化背景が異なり、全く日本語が話せない学生とのコミュニケーションは、普段の生活では味わえないことです。このような特別な経験は、被災地にある大学ならではの感謝するとともに、残りの大学生活でも様々なチャレンジをしたいとは思いました。

(内海善樹)



ロッキー君と

慶長使節資料3点世界記憶遺産に

～400年の節目迎える出帆の地に朗報～

6月19日、仙台市博物館が所蔵し、日本とスペインが共同推薦した「慶長遣欧使節関係資料」と、日本が推薦した「御堂関白記」の国宝2件が、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界記憶遺産に登録されたと文部科学省により発表されました。

今回日本とスペインが共同推薦した慶長遣欧使節関係資料とは、伊達政宗の使節として1613年に石巻をサン・フアン・パウティスタ号に乗り出港した支倉常長がメキシコを経て、スペインやローマにおける交渉過程で持ち帰った資料です。また、鎖国前の日本に、日本人がスペイン国王やローマ教皇と謁見したことを示す歴史的証拠でもあり、大変貴重なものでもあります。

実は慶長遣欧使節関係資料47点は、2001年の時点で国宝に指定されています。その内、今回政が推薦し新たに世界記憶遺産に認定されたのは、登録対象となる文書や絵画など3点です。

それは、ローマ市議会が支倉常長に与えた「ローマ市公民権証書」。ロザリオを手にした常長が、十字架上のキリストに祈りをささげる姿を描いた油絵肖像画であり、また、実在した日本の侍を描いた最古の本格的油絵肖像画でもある「支倉常長像」。1615年11月3日(元和元年9月12日)常長がサン・ピエトロ宮で拝謁したローマ教皇パウロ5世を描いた肖像画である「ローマ教皇パウロ五世像」です。これらが、ユネスコの世界記憶遺産の基準を満たした上で、登録にふさわしいと評価を受けたものです。

支倉常長が持ち帰った資料が評価され、世界記憶遺産に登録されたので、常長の通商開設と宣教師派遣を求める交渉は成功に終わったと思われる方が多いかもしれません。

しかし、スペインとの交渉は日本国内でキリスト教の弾圧が始まっていたこともあり失敗に終わりました。この後、数年間のヨーロッパに滞在し、やっとの思いで仙台に帰国した常長は2年後病没しました(別の説もあるようです)。

このように交渉の結果をみると、あまり気持ちのいい話に思えないかと思います。しかし、ローマ市からは常長一行に公民権が贈られ、常長に至っては貴族に列せられている。また、交渉の過程で通訳者に騙されそうになるなど、興味深いエピソードがあります。

今年で慶長遣欧使節出帆400年です。日ごろはメディアにも取り上げられることは多くありませんが、このような節目の年であり、なかなか知ることはない歴史に触れてみるのも一興かと思います。

(末永寛二)

*3点の画像は仙台市博物館提供。

東北六魂祭 in 福島

6月1日(土)と2日(日)にかけて福島で東北六魂祭が開催されました。東北六魂祭は仙台、盛岡に続き今回で3回目の開催となり仙台では約37万人、盛岡では約25万人もの人々を集めました。

東北六魂祭は東北の六大祭りが団結することによって東日本大震災からの復興への力強いメッセージを全国に発信する大きなキッカケになるとされています。

最初のセレモニーでは航空自衛隊「ブルーインパルス」6機による飛行パフォーマンスが披露されました。この華麗なパフォーマンスを目にした大観衆はとても興奮した様子で大きな拍手と歓声をあげていました。ブルーインパルスの飛行パフォーマンスの後、メインである東北六大祭りのパレードが始まりました。

パレードは地元の福島わらじまつりを先頭に山形花笠まつり、仙台七夕まつり、盛岡さんさ踊り、青森ねぶた祭、秋田竿燈まつりが市内中心部を約1キロ練り歩きました。それぞれが伝統の踊りや舞を披露し多くの人々を魅了しました。

普段これらの伝統的な祭りの数々が一度に共演する機会のはめったにないので、とても見ごたえがあったのではないかと思います。

初日は約12万人の大観衆が沿道に詰め掛け最終日も13万人の人々が福島に訪れました。2日間の合計は25万人を記録し当初予想していた集客数を大幅に上回ったとのことでした。

大きな盛り上がりで感動で幕を閉じた東北六魂祭。成功の裏にはこの日を迎えるための入念な準備やそのためのたゆまぬ努力があったのだと思います。また「東北を元気に」「福島に笑顔を」という復興にたいする強い想いが形となってあらわれたのではないのでしょうか。

福島県は放射能という恐怖におびやかされています。

ここでは日常生活においても放射能の数値を気にしなくてははいけませんし、食の安全や風評被害などのたくさん課題が残されています。特に子供を持つ親の人達は本当に心をいためています。

実際に福島の仮設住宅に住んでいる人達は家があっても帰れないというとても悲しい現実があります。

除染もまだまだ進んでいるとは思いません。福島原発の問題が解決されないかぎり放射能の危険をなくすことは難しいと思うので一日も早い福島原発の事故収束を願っています。そして、真実の情報を見極め何が正しいのかを考えて対処していくことがこれからは必要とされると思います。

東北と福島が元気になる、そのことが復興に繋がることなので東北六魂祭の役割は非常に大きいと考えられます。私は今回の六魂祭によって震災の困難に負けない福島と東北の不屈の精神を多くの人達にアピールできたと思います。

と同時に、福島を訪れることに必要以上の心配をしていた人には、ここは祭を開催できる場所だと伝える機会になったのではないのでしょうか。

次回の東北六魂祭の開催にも期待したいです。

(杉山大一郎)